論文

戦時下雑誌『国民文学』の位相
――「皇道精神の昂揚」を掲げた朝鮮文壇――

渡邊澄子

Korean literary world embracing Japanese
―― Emperor Worshiping as their guiding ideology ――

Sumiko Watanabe

はじめに

敗戦（終戦）から六十八回目の政府主催の全国戦没者追悼式での阿倍首相の式辞から、アジア諸国への加害責任への深い反省、哀悼の意、不戦の誓いは抜け落ちていた。首相はかねて村山談話、河野談話の見直しに意欲を示し、四月の国会では「侵略という定義は学界的にも国際的にも定まっていない」と答弁している。しかも、現政権下で、戦争準備を伴う憲法改訂が画策されている。日本人（だけではない）の生命と安全における最大危機とも言える福島原発事故による底なしの核汚染が拡大状況にあるにも拘わらず、原子炉の現状の真相は不明のままで収拾能力もないかのようであり、廃棄物処理に至っては人智も及ばぬほど難解のようで、それを科学の力で可能にしたとしても、天文学的期間と費用がかかるらしい。ところが、世界唯一の被爆国日本の首相が、自国民の苦悶をよそに原発売り込みのトップセールスに税金で歴訪して成果を得意げに語っていたのには言葉を失ったが、ＩＯＣ総会のプレゼンテーションで、福島原発の汚染水問題に就いて「全く問題ない」と明言、さらに事故処理についても「状況はコントロールされている」と事故の早期収束を根拠のないまま国民と国際社会に明言したことには度肝を抜かれた。自信満々にゼスチャーたっぷりの姿に恐怖したのは私だけではなかったと思う。事故の責任すら果たしていないのに。このような反国民的首相、政権を選んだのは国民なのだ。とすれば、彼らを選んだ多数国民の歴史認識の如何も問われるだろう。そこで、戦時下、京城（現ソウル）で唯一の文芸雑誌として発行を許可された『国民文学』によって、日本帝国主義の侵略の実態の一端を眺めて見ることにしたい。

『国民文学』

『国民文学』は一九四一（昭和一六）年一一月一日に創刊され、四五（昭和二〇）年五月一日終刊となった親日文芸誌である。崔戴瑞（チェ・ジェソ）によって、人文社から発行された、日本帝国の「皇道精神の昂揚に協力」強要に従って日帝の侵略戦争に協力する親日文学者たちの作品活動の舞台となっていたと略記される雑誌である。創刊号は定価七〇銭、送料三銭、編輯発行人崔戴瑞。発行所は京城府光化門通二一〇、合資会社人文社（一九四二年に株式会社。崔戴瑞が取締役社長）。創刊号は本文二三六頁。次号の一二月号は休刊。第二巻第一号（四二年一月）の二六六頁を最厚として以後は二〇〇頁前後が続き、第三巻（四三年）第二号辺りから次第に薄くなり最終号（五巻五号）は七八頁で、定価七〇銭、送料五銭、編輯発行人は石田耕造、発行所は京城府鍾路区梨花町二六ノ一となっている。石田耕造は崔戴瑞の創氏名である。復刻版は三九冊。一九四一年一二月はハングル版の予定だったが原稿が集まらず休刊、四二年五月六月は合併号として六月に発行され四二年九月号は休刊で四五年四月号の発行は現物がみつからず刊行の有無は不明という。次号の内容予告も終刊宣言もないまま四五年五月号で終わっている。突然の休刊（廃刊）は戦時状況や用紙・印刷事情によるかとも考えられる。

ところで、韓国では『国民文学』の位置づけとして、親日派による「日帝末期の皇民化、戦時政策の一環として強制された文学運動」というのが一般的のようだ。「親日派」とは、日本の朝鮮支配に協力した朝鮮人に対しての呼称であり、「親米」のような友好的意味合いを持つ用語とは異なり、「附日」も「親日」と似た意味で、日本の権力層に密着した朝鮮人を言う（李修京『近代韓国の知識人と平和運動』二〇〇三・一、明石書店）。戦時下、文学界が親日派の独擅場になった歴史背景にこそ日本帝国主義の侵略の実態があったのだ。

『国民文学』発刊の歴史背景

『国民文学』執筆者を大まかに分類すると、中心をなすのは韓国（朝鮮）人文学者であるが、この人達に次ぐのは京城帝国大学教授を多数擁した日本人である。これら日本人のなかには校長など教育者の多いことと朝鮮総督府関係者およびメディア関連者が名を連ねている。とりもなおさず、日本帝国主義の侵略の実態を示すことになっているだろう。

ところで、参照した書籍で使われている「朝鮮」と「韓国」混用の基準の曖昧さに戸惑った。そこでごく簡単に本稿に関連する歴史に触れておくことにする。日本の韓国併合は一九一〇（明治四十三）年八月二十九日の「韓国ヲ帝国ニ併合スルノ件」という「詔書」による。だが、併合後の統治形態、総督府官制の大綱などは一年前の一九〇九年七月の閣議で既に決まっていたという（山辺健太郎『日本統治下の朝鮮』岩波新書）。こ

のときの併合方法順序細目の書かれた覚書別紙第二号の内容一三項目と「附」のなかに、「総督ハ天皇ニ直隷シ朝鮮ニ於ケル一切ノ政務ヲ統轄スルノ権限を有スルコト」というのがあり、これが侵略の始まりと思われる。この決定を得て、初代朝鮮総督寺内正毅（元帥陸軍大将）が併合処理方案を出して決定した方案要綱の「第一　国称ノ件（勅令）」に「韓国ヲ改称シテ朝鮮トスルコト」とあって、日本が韓国の国名を朝鮮と変えたのだった。天皇の「併合詔書」が出たその日に発表された「韓国併合ニ関スル条約」の第一条は、「韓国皇帝陛下ハ韓国全部ニ関スル一切ノ統治権ヲ完全且永久ニ日本国皇帝陛下ニ譲与ス」となっているのを、併合は侵略ではなく円満な譲与だったとする説もあるが、『日韓併合小史』（山辺健太郎）その他から、「日本軍の強大な武力を背景に、韓国上層の一部を買収して行われた」侵略であったとする歴史観が正しいだろう。そのことを実証するのは併合の翌月にできた朝鮮総督府官制である。朝鮮総督府官制の第一条は、「朝鮮総督府ニ朝鮮総督ヲ置ク」「総督ハ朝鮮を管轄ス」、第二条「総督ハ親任トス陸海軍大将ヲ以テ之ニ充ツ」（以下略）とあって、軍人が朝鮮と国称を変えられた韓国の絶対権限保持者、統治者とされたのだ。以後、年を追ってとりわけ「満州事変」後、急速に侵略の度合いは深化していくが、今は韓国史を論ずる場ではない。だが、省筆できないのは韓国民がこぞって日本統治を歓迎して容認してはいなかったことである。

民族独立運動は朝鮮全土に拡がっていた。特筆すべき事件に、一九一九（大正八）年三月一日に、高宗の葬式を機として起きた「三・一運動」と呼ばれた武装抗日独立運動を軸とした全土におよぶ大暴動事件がある。高宗の葬式が機とされたのは韓国王朝最後の国王だった高宗は、日本の侵略に反抗をしていたし、その妃が日本人に殺された上、併合の前に退位を強制されたことなどに対して国民の高宗への同情と痛憤から、高宗の死への哀悼が亡国への哀悼となり、独立への熱望になったと見られている。元山ゼネスト事件は一九二八（昭和三）年九月一四日から翌二九年四月にかけて闘われたゼネストに発展した労働者の大争議である。元山労働連合会は企業に対して、（一）日本人監督の免職、（二）最低賃金制の確立、（三）賃金値上げ、（四）解雇手当の制定、（五）作業中の負傷者に手当支給、（六）作業中の死者家族への慰謝料支給を要求したが回答がなかったためゼネストに発展したのだった。光州学生事件は一九二九（昭和四）年十一月三日、全羅南道の光州で朝鮮人学生への日本人学生の暴行に対しての抗議運動で全土に及んだ学生が主体となった民族運動だった。朝鮮語学会事件とは朝鮮人だけでつくっていた学会で『ハングル大辞典』の編纂を進めていたが完成直前の一九四二（昭和十七）年十月一日に編纂に携わっていた学者たちが治安維持法違反の嫌疑で根こそぎ逮捕された事件である。理不尽な逮捕で不起訴、起訴猶予になった人もいたが、酷い拷問と寒気、粗悪な食事で獄死者も出ていて、一九四五年八月十五日の解放で解放された事件だが、韓国（朝鮮）を民族として抹殺をはかった朝鮮総督府政策による。民族固有の国語が民族にとって如何に大切かは明白だろうのに民族の言葉まで抹殺しようとしたのである。もし、日本人が、辞書も、あらゆる日本語書も焚書にされて諺文使用の制度を押しつけられたらどうであろうか。民族＝個の尊厳の掠奪が侵略の極みでなくて何と言うべきだろうか。当時は国民学校だった小学校では日本語教育の徹底化がはかられてもいる。『国民文学』創刊は、まさに朝鮮語学会事件と機を一にする。総督府は朝鮮人の「皇民化」の徹底をはかり朝鮮人が発行

していた新聞の題号からハングルを削除させたのだった。『国民文学』の「国民」とは「皇民化」すなわち日本帝国主義下の日本国民のことで、「皇民化」させられた韓国（朝鮮）人の文学ということになるのだろう。鳥肌がたつ。

諺文（ハングル）による『東亜日報』『朝鮮日報』が総督府によって一九四〇年に廃刊させられた頃の朝鮮語の文学専門誌は創作面での李泰俊主宰の『文学』（一九三九・二～四一・二）と、評論面での崔戴瑞主宰の『人文評論』（一九三九・一〇～四一・四）の二誌であったが日本官憲によって『国民文学』一誌に統合させられたのだった。

『国民文学』主宰者崔戴瑞と京城帝国大学

韓国文学、韓国文学史に疎く、ハングルを読めない私だが、日本語資料を通して得た崔戴瑞像を粗描してみよう。彼は『国民文学』で果たした自己の役割について解放後、反省、懺悔したとは思われず、韓国文学界も戦争責任の徹底糾明を行っているようには思われない。戦時下、「皇民化」の指導的役割を積極的に果たした彼は、解放後は評論界の第一線からは退いたものの延世大学教授を務め続け、『文学原論』『シェークスピア芸術論』（共に六十三年）など研究者活動を行っている。崔戴瑞（一九〇八～六四）は黄海道・海州の生まれ。京城帝大英文科卒後ロンドン大に留学し、帰国後、京城帝大講師、普成専門学校教授などを勤めたが、三十年代初めからT・E・ヒューム、I・A・リチャーズ、T・S・エリオットなどのイギリス文学を紹介する評論を書き始め、間もなく主知主義文学批評の旗手として文壇に地歩を築いたという。田中英光の戦後作品『酔いどれ船』（一九四九、小山書店）には崔健水（崔戴瑞がモデル）について「かつてはマルクシズム文芸理論家として、朝鮮第一の人物」で「朝鮮の蔵原惟人と呼ばれた」ともある。京城帝大時代は「文科B」に首席入学し、予科在学中にシェークスピアに関する論文を提出したほど成績抜群の学生で、英文学者で詩人の佐藤清教授に親炙し、佐藤清教授の愛弟子と目されていた。崔は日本人学生とばかり親しくしていて親日派と見られて朝鮮人学生から殴られたこともあったらしいが、正月休みにビール瓶をぶら下げて夜更けに主任教授高木市之助を訪ねて、「先生たちはどんなにいばったって僕たち朝鮮人の魂を奪うことはできないよ！」と「凄文句」を発したというエピソードを持つ気骨ある青年だったという。知性論者として高い評価を得ていた学者だった崔戴瑞が積極的に日本帝国主義のプロパガンダを果たすことになったのは何故だろうか。

ところで京城帝国大学（解放後のソウル大学の実質的前身）は一九二四（大正十三）年に、日本の植民地の教育政策の施行から、親日派の知識人を養成することを目的として設立された大学で、韓国侵略の礎の朝鮮総督府と一体のものだった。日本人教授陣は、設立時から十五年間勤めた安倍能成をはじめ、他に日本語学の時枝誠記、文学の高木市之助・麻生磯次、歴史の今西龍など錚々たるメンバーである。安倍能成はこの大学の設立目的を正当と理解した上で着任したのだろうか。単身赴任で頻繁に日本に帰っていて、十五年もいながら「朝鮮」語はまるきりダメだったと

いう。朝鮮人の白衣、家屋の瓦屋根の反り、素朴だが機能性抜群のジゲ（背負子）その他を称賛し、韓国の自然や風俗や文化、それを持つ韓国人への愛着や好感をこの地に関連した文章のなかに言葉多く描いている。そこには「日本文化が中国文化の影響なしに今日の水準に達し得なかったらうことは、万人の正直に認めざるを得ないことであり、我々はこの文化を伝へてくれた昔の朝鮮人に感謝してよい」（「朝鮮文化門外観」『槿域抄』一九四七、齋藤書店）ともある。安倍は「日鮮融和」政策を皮相的に受容していたのではないだろうか。師の漱石が存命中だったら京城帝大には赴任しなかったかもしれないと私は思いたい。崔在喆の「安倍能成における『京城』『京城帝大』」（『韓流百年の日本語文学』）における次の一文に私は慰藉される。敢えて引用しておきたい。

戦後、安倍の「日鮮共同の基礎―朝鮮人諸君へ」（一九四七）等に表れた弁明と反省を検討すれば、彼の思考の変化を確認することができる。朝鮮滞在中に述べた「日韓融和の基礎」を自ら引っくり返して弁明し、日本が始めた「戦争の結果は大東亜共栄圏を作らずして大東亜共貧圏を作った」と言っている。また、「総督府の高圧的強制的同化政策に耐へられぬ気持もあり、逃避の念を抱いて朝鮮を去つた」と告白している。すでに、安倍は戦中の文章「知識人の反省」（一九四一）で、「知識人は自分を社会の動きの圏外に置いて、出来るだけそれから逃避しようとはするが、実際はそれに引きずられて行くといふことになり、積極的に働いてゆくことが出来なくなる。これは又社会国家の支配者の知識人に対する扱ひかたにもよるのだが、これは知識人の陥り易い弊害だ」と反省を込めて自評し、「知識人の任務は能動的な認識の力を発揮するのである」と締めくくっている。

この時期の京城帝大教授に、戦後、反省・慚愧・謝罪した人を安倍能成以外に私は知らない。崔在喆はこの文章に、安倍の良心的態度に対して時枝は韓国における日本語の「国語化」のために、麻生は朝鮮総督府属兼編修書記として国語（日本語）の教科書執筆を担当し、今西は歴史記述に植民地政策を積極的に取り込んでいたとも書いている。

ところで当時の京城帝大学生からは、後年、有用な人材を輩出しているが、植民地建設に寄与する人物養成趣旨に適合した親日派を多数生み出しているのは当然としても反日イデオロギーの武装を解かず隠しもち続けた者もかなりいたようである。ソウル大学に引き継がれているように思われるが、京城帝大には立身出世志向が学風にあったらしい。この学風を身につけた崔戴瑞にも立身出世欲望があったらしいが、その背後に師・佐藤清の存在は欠かせない。

『国民文学』―主宰者・崔戴瑞の思想を通して

復刻版三十九冊中、崔戴瑞名のほか主幹、創氏改名による石田耕人（評論）・石田耕造（小説）名での登場は三十二回であるが、他に崔戴瑞執筆

による巻頭言や編輯後記があって当然ながら最多登場者である。次ぎに登場数の多いのは十八回の佐藤清で、三番目は作家の李石薫（日本名、牧洋）である。牧洋については理解を示しながらも、「皇国イデオローグの機能をはたしたことは、これを否定することができないであろう。そのかぎり、犯罪的ともいえる彼の歴史の責任はやはり問われなければならない」とした中山和子の論（『差異の近代』二〇二四・六、翰林書房）に譲ることにするが、崔戴瑞の思想に多大の影響を与えたと思われる佐藤清という人は一体どんな人なのだろうか。詩人とあるが講談社版『日本近代文学大事典』その他めぼしい文学事典には載っていないが、『東北近代文学事典』（二〇一三・六、勉誠出版）には載っていた。佐藤清（一八八五～一九六〇）は仙台市の生まれの詩人・英文学者で、旧制二高から東京帝大文科大学英文科卒。漱石の講義も聴いている。早くから詩作に励み、女高師（現お茶大）や日本女子大の講師を勤め、大正十三年に京城帝大予科教員嘱託となって英語・英文学研究の為に英仏に留学、大正十五年に京城に帰って京城帝大教授に就任。以後、盛んに詩や評論を発表している。『国民文学』発行時期についての記述は、「昭和十七年には京城で第六詩集『碧霊集』（人文社）を刊行した。在京城時代には崔戴瑞の『国民文学』に発表の場を拡げ、朝鮮文人報国会会員および理事となる。昭和二十年に京城で定年退官を迎えるまで、約二十年間、朝鮮と日本を往復する生活を送った」とのみあって、以後は、「敗戦後、東洋大学英文科教授を経て、昭和二十四年に青山学院大学文学部教授に就任。二十五年には日本詩人クラブ評議員。翌年、未発表の『回想記』の中に象徴主義に対する激しい批判を記した。昭和二十八年、第七詩集『史詩聖徳太子その他』（自家出版）刊。翌年には個人季刊誌『詩声』を創刊、以後三十五年まで全二十八号を出す。昭和三十年の『詩声』第四号から二十六号まで『明治詩論史』を連載。昭和三十五年中央線吉祥寺西荻窪駅間の無人踏切で事故により死去」とある。没後は教え子たちの手で第八詩集『おもとみち』（書肆ユリイカ）が出版され、三十六年には『佐藤清遺稿詩集』、三十八年には『佐藤清全集』（全三巻）が詩声社から刊行された、と書かれている。執筆者は野坂昭雄。この記述では皇国イデオローグを積極的に果たした犯罪的戦争責任問題が総て隠されてしまい、不慮の死は傷ましいが栄光の生涯像になっている。以下、崔戴瑞の『国民文学』に注いだ熱情とそれを支えた思想を以下に略記してみよう。

創刊号の「国民文学の要件」には、「文学は意識的にでも無意識的にでも国家の宣伝手段になるのであるが、然しそれと同時に文学は国民の性格を形成してゆくと云ふ遥に悠久な又遥かに根柢的な責務を負はされてゐる」ので、「日本精神に依つて統一された東西の文化の綜合を地盤とし新しく飛躍せんとする日本国民の理想を謳つた代表的な文学として今後の東洋を指導すべき使命を帯びているのである」とあり、結びの部分には、「国民に教へるために、国民を形作るために書くと云ふ激しい意欲がなくては真の国民文学は生まれない」、「文学こそは教育なりと云ふ信念」で文学は創造されねばならないと、日帝のプロパガンダたらんとする立場が鮮明されている。それが崔戴瑞にとっては韓国（朝鮮）文壇の革新でもあったのだ。崔戴瑞執筆と思われる創刊号の巻頭言「朝鮮文学の革新」には、「『国民文学』は朝鮮文壇の革新を図るべく新しき意図と構想の下に生まれ出た。新しき構想とは何か？第一に重大な岐路に立つ朝鮮文学の中へ国民的情熱を吹き込むことに依つて再出発せしめること、第二に稍々もす

れば埋没されさうな芸術価値を国民的良心に於いて守護すること」と言い、「狂瀾怒涛の時代に」「清明なる心とひたむきなる熱情とを以て御国のために仕えへたい」とある。「御国」とは日帝のことなのだ。

創刊後九ヵ月を経た四十二年八月号の「朝鮮文学の現段階」にはこの雑誌の方向性が明確になったことが示されている。『国民文学』が「朝鮮」唯一の文芸雑誌になったのは「主動は警務当局で、当面の理由は云ふまでもなく用紙節約にあつたが、当局としてはこの際雑誌統制に依り朝鮮文壇の革新を一気に解決したい意図を有して」いたからで、当局との間で取り決められた編輯要綱は、（一）国体観念の明徴　（二）国民意識の昂揚　（三）国民士気の振興　（四）国策への協力　（五）指導的文化理論の樹立　（六）内鮮文化の綜合　（七）国民文化の建設（各項目はさらに細かく規定）だった。彼は、「天皇帰一」と「八紘一宇」を『国民文学』発行の要諦とまとめている。まさに民族主義・自由主義・個人主義まで排除させられた日本帝国の国策への隷属だった。編輯スタッフのなかには日本への盲従や同化であってはならないという主体性維持論者もいたが、総督府権力には抗しきれなかったと思われる。

民族独立問題の要因として「ことば」は重要だ。当初、『国民文学』は年四回国語（日本語）版、八回は諺文（オンモン）（韓国語）版を予定していたが、徴兵制実施やそれ以前の当局および総力聯盟の国語普及運動を知識階級が率先すべきとの認識に立って、ハングル作品の載ったのは四十二年二月号と三月号だけで他は全頁国語と称した日本語になっている。その理論付けとして諺文文学では「半島人」のみのものになってしまう。読者が半島二千万ではなく日本人八千万合わせて一億の全国民のものとなり、やがては十億の大東亜諸民族のものになるのが理想であると「英吉利文学に於ける蘇格蘭文学」の例を挙げているが、今だから言えることだとしても私には日帝への屈服に対する牽強付会の弁明のように思われる。四十二年六月号発表の「徴兵制実施の文化的意義」を読む私の心は泡立つ。

四十二年五月八日の閣議で決定された朝鮮での徴兵制実施に、「多年の待望」だったので「感激一入」、「畏くも天皇陛下が半島二千四百万を『股肱と頼み』給ふた意義は大きく」、これによって半島人の国民意識欠如が払拭された、徴兵制の実施は「確実に而も永久に祖国観念を把持」できた「幸福を想ふたゞけで胸は膨らむ」と書いている。韓国国民性が「文弱」なのは「永い間極端な文治に馴らされ」てきたためで、その結果、「義勇奉公の精神」「責任観念」「団結心」の三大欠点を持ってしまったが、「内地（日本）の婦人が世界に冠たる軍国の母として絶賛される所以の力はその伝統的なる天皇帰依の宗教的信念」から、「陛下のためには喜んで命を捨てる」子供を育てるところにある、と述べている。呆れた論だが、京畿女学校校長の琴川寛（日本人）もこの論調で韓国（朝鮮）人女性を教育している。すなわち「徴兵制度実施と女子教育」（四十二年七月号）に於いて、「今日の女子教育の目的は忠良なる皇国女性の育成」にあり、「皇国女性」とは「先ず軍人の妻とな」って子を生み、その子を「陛下の股肱たる光栄を擔はせ、護国の神として国民から敬仰される人物」に育てることであると言葉を尽くして教えているのだ。

崔戴瑞は徴兵制が「宗教、芸術、思想あらゆる文化面に於いて朝鮮人の生活と同時にその実質を根本的に改造向上せしめる」ものとの確信を披

瀝していて、徴兵されて戦地に赴いた若者が他国のために殺され殺す理不尽な凄惨さへの想像力は皆無のようだ。「半島人は如何にすれば大東亜共栄圏の建設に直接参与し得る」か、生産拡充、労務提供、献金、貯蓄などと御奉公の道はいろいろあるが、徴兵制実施によって「名実共に半島人は皇国臣民となり、大東亜の指導民族となり得る途が拓かれたのである」、「大東亜戦争は世界史の転換を目指すもの」なのだと言う。彼は解放後、自己の確信に充ちた日本帝国主義指嗾について懺悔も責任も取っていないかのようである。この号には十一名の「名士・徴兵の感激を語る」が載り、「徴兵制度実施記念論文懸賞募集」が掲げられ、応募作四百余篇あったなかから以後三号にわたって傷ましい当選論文が掲載されている。四十三年八月号掲載の「徴兵誓願行」の「徴兵の発表があつた日から、私は上代人を想ふこと頻りである」に始まる論は佐藤清の愛弟子としての洗脳ぶりを示している。「佐藤清氏の魂の籠つた『慧慈』(注：三十八年八月号に佐藤清は長詩「慧慈」を掲載)」に依って、慧慈が推古天皇三年に聖徳太子の師となって仏教の弘布に尽力した歴史を縷々と述べ、慧慈の言葉という「大和の国に聖まします」を引いて、「当時の日本は既にさうした威徳と魅力をば近隣諸国に放つてゐた」のであると『日本書紀』や『古事記』を現代に持ち込んで論じ、「八紘に普き御稜威とは日本文化の光が世界に照り輝くことである」とあって嗤うに嗤えぬアナクロニズムと感じてしまうが、佐藤進に吹き込まれたものと思われる。佐藤進の犯罪性は深い。この認識から崔戴瑞は続ける。「満洲を見よ。支那を見よ。更に泰を、仏印、そして馬来を、フィリピンを、ビルマを見よ。敵米兵の魔手から解放され、道義日本の光の下に、山川草木悉く蘇るの状ではないか」と。四十三年と言えばこの巻刊行の八月までに、『近代日本綜合年表 第二版』によれば二ューギニア・ブナの日本軍玉砕、ギルワ撤退で戦死者7600人(一月)、ガダルカナル島撤退、地上戦闘の戦死者・餓死者2万5000人(二月)、ニューギニア増援のための輸送船団全滅、海没者3600人(三月)、連合艦隊司令長官山本五十六戦死(四月)、キスカ島の日本軍撤退などとあって、日本の敗戦は心ある人々にとって時間の問題になっていたのだった。偽りの大本営発表を多くの日本人は信じようとしていたが眉唾に感じていた人も多かったらしいが、崔戴瑞は信じ切っている。『戦陣訓』の「軍は天皇統帥の下、神武の精神を体現し、以て皇国の威徳を顕揚し、皇運の扶翼に任ず」や、「苟も皇軍に抗する敵あらば、烈々たる武威を以て断乎これを撃摧すべし」、また、「軍人に賜りたる勅諭」の「我国の軍隊は世々天皇の統率し給ふ所にこそある」など神武天皇まで持ち出して、「皇軍の使命が単なる異民族の征服や、意味なき破壊ではないと云ふことが容易に理解される」ので、「日清戦争、日露戦争以来、満州事変、支那事変、大東亜戦争と打続く現代日本の動きは終始一貫、皇道の宣布であり、道義日本の世界的拡充である。世界にこれ程正しく、立派な軍隊があるであろうか？　皇軍が世界で最も強いのは、畢竟するに、斯くの如く天皇の正義、人類の公道に基いてゐるからだと思ふ」と。この文章の結語は、軍人勅諭の「朕は汝等を股肱と頼み」から、「我々半島二千四百万一人一人に対せられ、陛下御自ら、お前達を手足と頼むぞと仰せられたのである。我等生を朝鮮に享くるもの、感奮せずんばあらず」、「天とも父とも仰ぎ奉る陛下御自ら『頼むぞ』と仰せられたのである。感激と云はうか、感奮と云はうか、兎に角我々は身命を抛ってこの大御心に報い奉らねばならぬと心中深く誓ふ」これが「誓願である」となっている。

崔戴瑞の「学徒出陣をめぐりて」（四十三年十二月号）は「陸軍特別志願兵臨時採用制」を「朝鮮の学徒に与へられた最高の栄誉」とする視点にたったものだが、「誰のために戦ふか」「何故に日本のために命を捧げなくてはならないのか」という苦悩に悶えた若者の多かったことが顕示され、それには「神国」日本との内鮮一体論で応えているが、「徴兵と文学」（四十四年八月）はさらに踏みこんで佐藤清の作品を挙げて絶賛し、「学徒出陣が、この老詩人の魂を如何に深くゆすぶったかは想像に難くない」と絶賛している。彼の研究室からも幾人かの学徒が出陣している。崔戴瑞を感動させた佐藤清の詩五篇の「傑作」のうち「古代叙事詩のやうな荘重な響き」を持つという、「三千年の歴史は／今きみたちの中に生きかへり／きみたちは幾億万の／祖先の霊と同じ呼吸をしてゐるのだ」を含んだ「学徒出陣」が発表されると「新聞に転載され、幾多の壮行会席上で朗読され、つひに総督府編纂の中等国語教科書に採用された」という。さらに「朝鮮学徒出陣賦」では、朝鮮学徒に「人間の中の花　花の中の花よ」と呼びかけ、「二千年／内鮮の血と文化はまざり／きつてもきれぬ宿命を作り上げてゐる／だが　今はたゞに血と文化の交流だけでなく／内鮮全く一つとならなければ／とても生きられぬ土壇場にきているのだ」と謳い、最後は「わたしたちの愛するものよ／きみたちが立ち上がり　国難に赴くことに依つて」「わたしたちの歴史の目的は／しづかに　力づよく　実現せられ／二つのもの一つとなり　全く新しい一つの生命が／新しい生命の世界が生れ出づるであらう」と続いた詩句を引用しているが、引用するほどのものだろうか。日本の戦争に韓国（朝鮮）のあたら若い命を犠牲にするのに似非論理「内鮮一体」で繕ったに過ぎないのに。「内鮮」とは日本と朝鮮のことだが少なくとも私の知っている限り「文化」は食事のマナーに象徴されるが交じってなどはいない。ところでこの頃から崔戴瑞は創氏改名して『国民文学』主幹としては崔戴瑞、評論家としては石田耕造、作家としては石田耕一の使い分けをするようになっている。改名するについて崔戴瑞は書いている。「君は日本人になり切れる自信があるか？　この質問は更に次のやうな疑問を起した。日本人とは何か？　日本人となるためにはどうすればよいのか？　日本人たるためには、朝鮮人たることをどう処理すればよいのか？（略）私は昨年の暮頃からいろいろ自己を処理すべく深く決意し、元旦にその手始めとして、創氏をした。そして二日の朝、そのことを奉告（ママ）のために、朝鮮神宮へお参りした。大前に深々と首を垂れた瞬間、私は清々しい大気の中に吸ひ上げられ、総ての疑問から解き放たれたやうな気がした」（「まつろふ文学」（天皇に奉仕する文学の意）、四十四年四月）と。これが崔戴瑞の大学アカデミズムで培われた思想だった。

崔戴瑞は『国民文学』に石田耕人名で歴史小説二篇「非時の花」（四十四年五月～八月、四回連載）、「民族の結婚」（四十五年一月～二月）を発表しているが、「非時の花」は学徒出陣に刺激されて、朝鮮の青年に自信を持たせようとして書いたと述べている。

崔戴瑞についてはなお、座談会や対談での発言に於ける問題点は多々あるが、紙幅の都合上以下省筆し、他の機会に譲りたい。戦時下朝鮮に於いて個人の力ではどうしようもない状況下で、被支配の立場の人間には「（1）体制派となる＝親日派、（2）パルチザンとなって闘う、（3）監獄闘争という三つぐらいしか選択肢はないだろう」、とすれば、「冷静に日本の敗戦を分析することなど不可能だったはずだから、」「生活がかかって

いる」のだから「親日派にでもなって地位向上を目指」したとしてもそれを「否定しきれ」はしない、ましてや、彼は日韓条約締結から三年後に生まれて「植民地の子」として育っているのだからと李健志は物わかりよく理解を示しているが（『朝鮮近代文学とナショナリズム』）、解放後の生き方から、彼は自己の跳梁期を「黒歴史」としていて、倫理的にも許されることではないだろう。

『国民文学』と日本人

朝鮮総督府の圧制によって文人協会が結成（一九三九年十月）された以前には植民地朝鮮で日本人の文学活動は、同好会の集まりとして韻文主流で僅かになされていたに過ぎなかったらしい。『国民文学』に登場する日本人名はおおよそ二三〇名に及ぶ。日本人で登場回数の多い順では佐藤清が十八回、杉本長夫が十六回、京城帝大教授近藤時司が十四回、田中英光が十二回、寺本喜一（国民総力朝鮮聯盟文化課長）と則武三雄（平安北道警察部職員）十一回で何れも詩人、作家とされている。次いで黒田省三（九回）、青木修三と楠田敏郎と、京城日報学芸部長の寺田瑛と京城帝大法文学部助教授の萩原浅男（七回）と続き、その後は津田剛（緑旗聯盟主幹、国民総力朝鮮聯盟宣伝部長）の六回、京城帝大法文学部教授松月秀雄の五回となる。

作家・詩人の肩書きを持つ文学者は、前掲の田中英光・佐藤清、則武三雄のほかに、書評や座談会出席を含めると、秋田雨雀、新井雲平、安東益雄、飯田彬、大島修、小尾十三、菊池寛、木山捷平、久保田進男、椎木美代子、汐入雄作、島田邦雄、城山豹、竹内てるよ、田中初夫、寺本喜一（国民総力朝鮮聯盟文化課長）、中野鈴子、西亀元貞、南川博、宮崎清太郎、三好富子、湯浅克衛（日本文学報国会代表）、横光利一、吉尾なつ子、吉川江子などで、長田幹彦と宇野千代が日本から短文を寄稿している。他で圧倒的に多いのは時枝誠記を始めとした京城帝国大学教授で十八人に及びさらに図書館長、助教授、講師が各一人加わり、また、京城医学専門学校、延禧専門学校、京城第一高女、徽文中学校、京畿高女、京城公立中学校、国民学校の校長など、教育者が多いのは、韓国（朝鮮）人の日本（人）同化教導の任務を負っていたことを顕示する。その任務の露骨さを示すのは、朝鮮総督府の検閲官、情報課長、学務局編輯課、教学官、保安課事務官、労務課長、図書課長兼学務課長、農林局などの総督府官人、朝鮮映画社所長ほか役職者、朝鮮映画配給社、京城日報編集局長・社会部長、毎日新報社専務・政経部長、京城放送局第二放送部長などメディア関係者の多いこと、さらには、朝鮮軍参謀（中佐）、海軍上等兵曹、朝鮮軍報道部（大佐）、朝鮮軍報道部長、京城海軍武官、海軍兵長、海軍大尉など軍人の参加であるが、要職を日本人が占めていることに侵略の実態がまざまざと感取される。

『傷痕と克服』は津田剛を、「緑旗聯盟（一九三七年に作られた「日本国体の精神に則」る民間の総督府御用団体。機関誌『緑旗』を発行した日本人主体の団体で、当時の朝鮮文学者に猛威をふるった）の責任者として批判し、京城帝大法文学部教授で朝鮮文人報国会理事長の辛島驍を「え

せ学者」と位置付けている。辛島は創刊号の座談会「朝鮮文壇の再出発を語る」で、「大東亜共栄圏を確立させることの意義を作家が知的に把握することを新文学出発の前提」とすることはもちろんだが、把握した知的なものを感情にまで築き上げねばならぬと述べ、四二年十二月号の大東亜戦争一周年を迎えた「私の決意」では、大東亜戦争の勃発で、「我々の血潮は燃え上つて、この敵を一挙に屠らんとする気概を示し、凡ゆる点に於いて活溌な気魄が見られた」、今、大切なことは敵愾心を燃やして、困難や不便の原因が敵米英にあることを常に深く心に留めることと書いている。一九二七年に赴任し、京城帝大教授退職後は東京帝大教授となり、定年退官後早大教授となった国語学の泰斗時枝誠記は、「朝鮮に於ける国語」（四十三・一）の中で、「言葉は一つの思想媒体の機関であると同時に、又一の人間的行動であつて、それ自身固有の価値を持つもの」と述べた上で結論として、「半島人は須く朝鮮語を捨て、国語（注：日本語のこと）に帰一すべきであると思ふ。国語（日本語）を母語とし、国語常用者として言語生活を目標として進むべきであると思ふ」と言っている。林建志は「言語は『民族』を要求し、そして『国家を要求する』」（『朝鮮近代文学とナショナリズム』）と言い、金允植は、「金史良は、自分が日本語でだしたものは『その内容はともかくとして、やはり一つの誤ち』（注：『国民文学』に一九四二・一に「ムルオリ島」、四十三年二月～十月まで「太白山脈」を八回連載）であったと語り、李泰俊は『わたしは八・一五以前にもっとも脅威を感じたのは、文字より文化であり、文化より言語』であったといっている」（『傷痕と克服』）と述べている。そして、「金史良流の『朝鮮語第一を騒ぎたて何もせずに筆さえ折ればそれが抵抗か』という反問と、李泰俊流の『日本語で作品を書いたことが、いかに内容が抵抗的だろうと容認できない』という命題の対立」は「こびとのせいくらべ」みたいなものとも言っているが、私には心に突き刺さる問題として思考を迫られる。かつて偉い国語学者と思いこんでいた時枝誠記先生だが彼に反省、懺悔の言動はあったのだろうか。

日本文学報国会（会長徳富蘇峰、事務局長久米正雄）の結成は四十二年五月のことで、十一月には第一回大東亜文学者会議が開催され、これに崔戴瑞は参加している。作家というより『国木田独歩』他による日本近代文学研究者と意識してきた福田清人（一九〇四～九五）だが、日本文学報国会企画課長として、「日本文学報国会の皇動朝鮮研究委員会」設置（四十三年四月）を発表している。すなわち、文報内に農民文学委員会、大陸開拓文学委員会に次ぐ三番目の委員会として皇道朝鮮委員会を、政治面での内鮮一体を文学者が先頭に立つために、朝鮮の皇民化の促進とその現実紹介、内地における協和事業への協力、現地派遣の人選を当面の目的として設置する。そこには、文学者で朝鮮に関わりのある加藤武雄を委員長に、湯浅克衛、張赫宙、田中英光、頴田島一二郎、濱本浩、川上喜久子（注：彼女が尊敬していた父は、勅任官の軍人で京城帝大総長――一九四〇～四四――になった人）、三浦逸雄、保高徳蔵、楢崎勤を委員として構成すると述べている。この文章でも触れられている情報局によって日本文学報国会選定（野上彌生子も関わっている）の愛国百人一首発表は四十二年十一月だが、『国民文学』では四十三年二月から六月まで五回にわたって近藤時司による評釈が載っている。

四十三年三月号掲載の「新半島文学への要望」は、菊池寛・横光利一・河上徹太郎・保高徳蔵・福田清人・湯浅克衛と、本社側・崔戴瑞の座談

会だが大東亜文学者会議に出席した崔戴瑞の持ち帰ったお土産だろう。かなり長時間にわたっての座談会だが、韓国（朝鮮）の文学者の苦悩や民衆の実態についてよく知らず、かなり観念的な知識でもっぱら崔戴瑞への質問に終始している。菊池寛に特に言えるが、崔戴瑞＝朝鮮人文学者に対して上からの目線での物言いが気になるが、彼の考えは、諺文で書くのではなく、朝鮮文学を振興させるには市場にゆきわたりつつある国語（日本語）で書く、「之が宜い」、諺文でしか書けない作家でもいい作品なら日本語に翻訳すればよいなどと言っている。国語（日本語）常用政策を急速に進めていたとしても、一般民衆が日本語を国語として話し言葉とし、読み書きするのは民族の尊厳を犯す屈辱でもあって容易ではないだろうと私は想像してしまうのだが、彼らは全く気にしていない。私の心を凍らせたのは、朝鮮の若い作家たちに熱意が迸らないのは、自分は勿論、身内の者にも戦場に行った者がなく、銃後の奉公だけだったからだが、徴兵制の発表で肚の底から昂揚感が噴き出し祖国愛が本物になった、「愈々是で本当に片棒が擔げる」気持になった、と菊池に答えた崔戴瑞のことばだった。哀しくなるが、著名日本人作家に対する保身のための崔戴瑞のリップサービスだったのか、いや、多分本音だったのだろう。

四十二年十月号では巻頭言の文中に使われた「皇国臣民ノ誓詞」が翌月から毎号、目立つ扉の題字下に掲載されるようになっている。「誓詞」とは、「一、我等ハ皇国臣民ナリ　忠誠以テ君国ニ報ゼン　二、我等皇国臣民ハ　互ニ信愛協力シ　以テ団結ヲ固クセン　三、我等皇国臣民ハ　忍苦鍛錬力ヲ養ヒ　以テ皇道を宣揚セン」というもので、「皇国臣民」を叩き込まれる心身の辛さを思いやってしまう。紙幅の都合で引用できないのは残念だが、掲載された応募作品中の徴兵制記念論文当選作には涙を催される。学徒出陣について四十四年七月号掲載の金村龍済（中野鈴子の愛人で詩人、金龍済）の詩「学兵の華　わが朝鮮出身の光山昌秀上等兵の英霊に捧ぐる詩」の五連中一、四、五連を挙げる。

「先登志願の君につづいて／なつかしい学帽を風にすて／あたらしい軍帽の星をいただき／筆を劔に、書冊を地図に代へた時／幾万の足どりは青い雲を捲き立てた」（略）

「蛍もまだ早い大陸の夜のしじまのなかに／単哨の鉄道を急襲した大敵を捉へてたたき／ああ原野の草の葉に朱の血を流す時／『敵は……敵は』斃れてなほ任務を忘れず／『天皇陛下万歳』戦友の胸に華は刻まれた」

「われら二千五百万、また後輩の徴兵百万／この悲報に憤り燃えんとする時／二階級特進の恩命に亦感泣して叫ぶ／「ここに君の華あり。美はしき朝鮮あり／おお神位に昇る英霊よやすらかに」

文学的に必ずしも優れているとは思えないが、痛ましさで心が疼く。もし、彼が靖国神社に祀られているとしたら彼の霊は安らぐだろうか。四十五年一月号の「巻頭言」には新年に当たって最高度の用語で天皇を讃え、「炳乎として輝く大御稜威のもと、国民が大和一致、神州護持の信念に燃える以上、如何なる国難も突破して、皇祖皇霊に応え奉ることが出来る」のであり、今や「八紘為宇の大義名分」は「燦として世界史転換の光輝を放」ち、「野獣米英の如きは寧ろ鎧袖一触である。果然台湾沖に於ける大戦果につづいて比島沖の大戦果が挙り、今またレイテ湾頭絶対優勢の

体制下に、一挙太平洋作戦を覆さんとして居る。敵機よ来らば来れ、鉄壁の備えある我等は、従容莞爾として之を撃滅し去るのみである」と勇ましい。大本営発表がそのようにウソの発表をしていたのだろうが、戦況の実態は悲惨だった。だが、ここでは、「レイテ島の激戦に於て、靖国軍神部隊に参加して萬古に輝く武勲を樹てた松井秀雄伍長、並に薫空挺軍神部隊員として、敵飛行場に強行着陸の上決死斬り込みの偉勲を樹てた金原庚鎭軍曹、更に特攻隊に特別志願し隊長機に同乗して『今より肉弾突撃す』と、電鍵を採りしまゝ護国の神となつた通信兵、特攻隊勤王隊の林長守伍長」の「半島出身の三軍神」の「英名」を挙げて、「この三軍神の忠魂は皇軍日本魂の最高水準に達するもの」として「二千六百萬の同胞に身を以て教へてくれた」のであって、「我等もこの三軍神」に続かねばならぬと顕彰している。三人とも創氏改名された日本名だったことが辛い、辛すぎる。靖国軍神部隊などの部隊名にも泡立つ。

この座談会「新半島文学への要望」から五ヶ月後の八月号には、朝鮮現地でなされた座談会「国民文化の方向」が載っている。出席者は加藤武雄、福田清人、立野信之、古谷綱武、兪鎭午（作家、京城放送局第二放送部長）、李無影（作家）、寺本喜一（詩人、国民総力朝鮮聯盟文化部長）で本社側として、崔戴瑞、金鐘漢（詩人）によるが、日本浪漫派の影響だろうが「本源に帰れ」で古事記、万葉集、また三国史、三国遺事などが持ち出されて古典回帰がなされていること、「国語と朝鮮」のテーマでは、もっと積極的に国語（日本語）を自分のものにすることが精神の態度に直結するのだと語られていて、国民学校での熱心な国語（日本語）教育の成果により、知識人大人も叶わないほど彼らは内地人と同じ表現能力を身につけることに懸命になっていると報告されていて、居たたまれぬが、さらに、徴兵制が布かれて半島青年が正規の兵として銃をとることができるようになったのに、日本の作家のように朝鮮の作家に従軍の機会が与えられていないのは悔しいの嘆きに、半島作家にも従軍の機会があるだろうと答えられている。二ヶ月後の十月号には小林秀雄が「大東亜文学建設のために」として「文学者の提携」を書いている。「大東亜の新しい文化の建設といふ共通の理想のもとに、アジア各国の文学者達が提携し協力するといふ事は、まことに空前の盛時」と述べ、「御稜威の本に必勝の信を抱いた私達に対し、英米に勝算があろう筈はない」とも書いている。前記したように既に玉砕、撤退の続出する戦況にあったのに。

なお、この雑誌については問題点が山積しているが紙幅を失ったので、続稿は別の機会に譲ることにするが、中野鈴子の詩には触れておきたい。鈴子は私にとって敬して止まぬ中野重治の妹でプロレタリア詩人でもあった。重治は、被圧迫民族とされた韓国人への優しさの溢れた「辛よ　さようなら／金よ　さようなら」で始まる「雨の降る品川駅」の作者だ。重治の、妻・両親・妹たちに宛てた獄中書簡を大量に含む全集未収力『愛しき者へ』（上下、一九八三・八四、中央公論社）は涙なしには読めない感動的書である。四二年五月二日付け鈴子宛の書簡には、「朝鮮から返事（注：鈴子の愛人だった金龍済から）が来ましたから送ります。僕には意味の分からぬ点が多く、全体として僕の問うたことに対する応えになっていないけれども、鈴子の方ではまた鈴子としての解釈があると思うから、鈴子本人の判断に任せたいと思う。鈴子には黙っていてくれと言うような意味の言葉もあるがどういう意味かサッパリ分からぬ。いずれにしても、見込みはあるらしく思われるが、それも一応の見込みというところか

と思う。いずれにしても万事鈴子の判断にまかせる」という一節がある。意味不明だが、重治がこの手紙を出したこの頃、「徴兵の詩」として金鐘漢・李庸海とともに、詩「あつき手を挙ぐ」を鈴子は『国民文学』（四二年七月）に発表している。

「都会、町、部落／何処にも／朝鮮の人たち満ち溢れ／働き、たたかひ／生活を打立て」「話す言葉　国語正しく／われら朝夕／親密濃く深まりつゝ」「出征、入営を送る折々には／先んじて旗振り、万歳を叫ぶ／朝鮮の人たち」「朝鮮の人等／手に力こもり、唇は叫びつゝ」「心の底に徹し得ぬものがあるならん／常にわれかく思ひ、心沈みし」「今／朝鮮に徴兵令布かる」「こころ新たに／あつき手を挙ぐ」

この詩はどう読めるだろうか。神谷忠孝は、「皇民化政策に納得しない心情を抱く朝鮮民衆もいるだろうと推測してい」て、「心沈みし」の表現には「詩人の真意が隠されている」（「朝鮮版『国民文学』について」）と思いやり深く読んでいるがいささか深読みの感がしないでもない。金龍済（創氏名：金村龍済、一九〇九～九四）は在日十年間に日本の獄中に通算四年も厳しく拘束された、小林多喜二や宮本賢治の盟友でもあったプロレタリア詩人として闘った人だが、転向後帰国して〈親日文学派〉となって『緑旗』の編集部で働いた多作の詩人だった。鈴子の『国民文学』掲載詩は愛する金龍済の勧誘によったのではないかと思われる。「徴兵の詩」として謳っていて微妙であり、神谷の位置付けには疑問が残る。この詩の発表を重治は知らなかっただろうと思う。

田中英光について

『オリンポスの果実』（一九四〇・十二、高山書院）で知られる田中英光について、島田昭男執筆の講談社版『日本近代文学大事典』での田中に於ける朝鮮（韓国）と関わる時期の叙述は、早大卒後、横浜ゴム製造株式会社に入社して朝鮮京城出張所に赴任するが、三七年七月の召集で京城の龍山七九聯隊に入隊し一二月に除隊となるが、三八年七月再度召集を受けて中国山西省の最前線に送られる。「以後帰還するまでの約一年五ヵ月、山西省南部の山岳地帯を中心に八路軍の抗日遊撃隊と交戦」。一九三九年十二月平壌に帰還するが四〇年一月除隊後本社勤務となって東京に戻るが四十一年二月また京城の出張所勤務となり、「内地の日本文学報国会に刺激され朝鮮文人協会を組織、朝鮮文学の国策協力をはかる。一二月本社勤務となり朝鮮を離れる。（以下略）」とあり、『新版　現代作家辞典』には「残念ながら一方で朝鮮文学の国策化運動に加担することになる」（執筆者・島田）の一行だけで「国策協力」の実態は辞典原稿ということもあって暈かされている。田中は、三十五年三月か四月から四十二年十二月まで、その間二度の召集はあったものの約七年間近くこの地に親しんだことになる。京城在住の実質期間は短かかったにもかかわらず十二回登場の『国民文学』における田中英光の活躍振りを概観してみよう。

田中は「月は東に」（小説、四一年十一月）、葉書問答（「今後如何に書くべきか」、四十二年一月）、「我が創作信条」（特集　新しき国民文芸への

道、四十二年四月）、「黒蟻と白雲の思ひ出」（小説、四十二年四月）、「軍人と作家・徴兵の感激を語る」（座談会、四十二年七月）、新刊紹介　則武三雄『鴨緑江』（新刊紹介、四十二年七月）、「太平記について（古典研究）」（四十二年八月）、「国民文学の一年を語る」（座談会、四十二年十一月）、「呉王渡」（小説、四十二年十一月）、「大東亜戦争一周年を迎える私の決意」（四十二年十二月）、「朝鮮を去る日に」（四十二年十二月）、「忘れえぬ人々」（四十三年十月）など十二回ほど登場している。この地を去った後、日本で作家活動を展開しているが、四十六年三月に日本共産党に入党している。朝鮮での生活への峻烈な自己批判があってのことだったのだろうか。

ところで、『国民文学』について書かれた私が目にできた戦後の著書では此処で活躍した日本人についての記述は極めて少ない。多くは韓国人によって書かれているので、批判対象が韓国（朝鮮）人であるのは当然としても、その韓国（朝鮮）人を煽ったのは、日帝側の日本人なのだから、厳しい日本人批判がなされてよいはずなのにあまりない。手厳しいのは金允植である。金允植の筆は厳しい。「太平洋戦争末期、植民地朝鮮に君臨して、作家としてまた加害者として、退廃と享楽に身をまかせ、作品行為を行った」（『傷痕と克服』）と位置づけ、また、彼は「日本人詩人則武三雄とともに、日帝思想善導に献身的に努力した悪質な文学者であった。われわれがあえて『悪質』という表現をためらわないのは、それが文学と思想に関連しているからである。とくに田中は、金史良の『天馬』（『文芸春秋』一九四〇・六）という作品のなかにも、堂々たる加害者――親日韓国文学者たちの救世主として登場している。まったく田中は、小説においてとはちがって、実際はもっとも忠実な皇道主義者であった。かれの手になる『京城日報』の諸評論によっても、それを証明できる」と書いている。日本人に依って書かれた大村益夫の復刻版「解題」でも採り上げられているのはほとんど韓国（朝鮮）人である。この解題の結語は『国民文学』を見る視点として、「植民地支配の精神的加虐性を見てとることもできるし、一国の権力が他の国の精神文明を奪おうとした非人間的な試みが、倫理性もなく、結局は壮大な徒労に終わる過程を見ることも可能であろう」ときわめて穏健である。だが、別の所では、「田中英光は朝鮮文学界の帝国主義的再編成に力を貸した犯罪者である。朝鮮人と接触し、朝鮮人を『深いところでつかんでいた』としても許すわけにはいかない。ただ、かれは権力機構のなかに身をおいていることに罪の意識を持っていた。軍、官、財閥をふとらせるために仕事している自分がおぞましくて酒を飲み、酒を飲んではいっそう自己嫌悪におちいっていった。そこに一部の朝鮮人文学者たちとの間に、ある種の共犯者意識にも似たものがはたらいたのであろう」とも述べている。木村一信・崔在喆共編『韓流百年の日本語文学』の、金泰俊による「日本文学のなかの韓国・韓国人像」にしても、三谷憲正の「田中英光と〈朝鮮〉言説」にしても、戦後のしかも共産党員（入党一年位で離党したとしても）になったような田中によって書かれた『酔いどれ船』が中心で他作品は表題名を挙げているに過ぎない。西村賢太による「研究動向」（『昭和文学研究』第三十集）による書誌は詳しいが、田中英光研究は殆どが『オリンポスの果実』、太宰との関係、死に関した論である。この時期を素材とした『酔いどれ船』論は多いが、「はたしてこの小説がどの程度事実を反映したものであり、どれだけ実際の人物や事件に即しているのか」は「疑問」（川村湊「〈酔いどれ船〉の青春」、『群像』一九六六・八）であろう。川村は『国民文学』をみて

はいない。共産党入党という思想上の変化を経て以後の作品ということも考慮されていいだろう。そこで、戦後作品『酔いどれ船』については別に論ずることとして『国民文学』における発言に絞って紙幅の許す範囲で触れることにする。

小説は戦地体験で「月は東に」は北支での「紅槍会（そのようなのがあったのかどうかは未調査）」との激戦を、「黒蟻と白雲の思ひ出」も山西省の風陵渡というところでの戦闘を描いた戦場物語なので、今は措く。

「わが創作信条」（四十二年四月）で、「作家はまず真におのれを愛するもの」であること、「愛するという言葉は」「祖国の為に、肉弾と化して異境の海底に眠る」のもそのひとつ、「日本人は忠勇義烈、愛国の念比類なき民族」だがその色を生な色で使ってはいけないとある。「軍人と作家・徴兵の感激を語る」（四十二年七月）の座談会出席者は朝鮮軍参謀の浅井中佐と馬杉少佐、作家は牧洋（李石薫）・青木洪（洪鐘羽）・木下俊・田中英光、本社側に崔戴瑞・金鐘漢。ここでの田中発言を要約すると、新聞報道で徴兵制を知って有難いと感じた、徴兵制で欠かせぬ「国語」教育の徹底の必用、徴兵制を権利と思ったら間違いで与えられた「栄誉」なのだとあり、馬杉の戦場で死ぬ時、親神様の「陛下の赤子」として日本人は偽りなしに「万歳」が出るの発言に同調。浅井の夫婦は理解しあってなるのではなく知らない者同士でなるものだが、いつしか一体になっていく、まさに内鮮一体の姿なのだに同調して、「子供は皇国の御楯になれる資格がある」と結婚奨励。祖国観念把握が難しい、日本人の祖国は上御一人にあるので勇躍死に赴くが半島青年は「諦めて戦争に行く」の批判に対して、そこははっきり掴ませると牧洋。馬杉の天皇の「御肉体は人神」論に「完全に日本化」が必用と発言。贅言を挟みたい。住井すゑ（一九〇二～九七）の、人権平等思想覚醒は小学校一年のとき、村で行われた陸軍秋季特別大演習で天皇が一泊されたが、神様と教えられていた天皇がババをし、煙草を吸った跡を見て、なんだ、同じ人間じゃないか、と知ったことによるという。明治生まれの小学生でも解る論理なのだ。若者は軍隊に入らないと顔向け出来ないと感じているらしいが、の論に、若者は心配ないが心配なのは中年、特に女性ではないかと田中。田中はさらに、内地の作家は報道班として派遣されているが、半島の作家も是非動員を、「成るべく危ないところに」と発言している。「大東亜戦争一周年を迎える」「私の決意」（四二年十二月）には、内地に帰ることになったがもっと積極的な仕事を詔勅の仰せのごとく億兆一心で懸命に努力する覚悟とある。帰国後、特に共産党入党に際して在朝時代の検証はされているのだろうか。今後の課題にしたい。

まとめ

ひと言だけでまとめておきたい。韓国一都市の京城を中心とした文学者集団に限られた視界で、しかもまだ表面を撫でた程度に過ぎないが、国称、言葉、名前といった人間の生存上絶対であるべき尊厳に関わる問題を始めとして、侵略の度合いの凄まじさに今さらながら驚かされた。明ら

かになったことは、この雑誌に登場する人達の犯罪性と変換可能な加害性の検証が置き去りにされたままである場合の多いことである。戦争、原爆、原発など由々しい問題の風化現象、端的に表れているのが為政者の歴史認識といえるだろう。等閑にしては決してならない問題として、さらなる検証を進めたい。

参照した主なる書籍名

『日韓併合小史』（山辺健太郎、一九六六・二、岩波新書）、『日本統治下の朝鮮』（山辺健太郎、一九七一・二、岩波新書）、『傷痕と克服』（金允植、大村益夫訳、一九七五・七、朝日新聞社）、『近代日本と朝鮮人像の形成』（南富鎮、二〇〇二・七、勉誠出版）、『近代韓国の知識人と平和運動』（李修京、二〇〇三・一、明石書店）、『文学の植民地主義』（南富鎮、二〇〇六・一、世界思想社）『定本　想像の共同体』（ベネディクト・アンダーソン、白石隆・白石さやか訳、二〇〇七・七、書籍工房早川）、『朝鮮近代文学とナショナリズム』（李建志　二〇〇七・九、作品社）、『韓流百年の日本語文学』（木村一信・崔在喆編、二〇〇九・一一、人文書院）、神谷忠孝「朝鮮版『国民文学』について」（北海道文教大学外国語日本語コミュニケーション学科、二〇〇九・三）及び三原芳秋の「Metoikos たちの帝国―T・S・エリオット、西田幾多郎、崔戴瑞―」、大村益夫による復刻版（緑蔭書房、一九九七・一一～九八・四）解説他。